教職課程センター紀要　第2号　335－337ページ，2017年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.2 335-337, Dec. 2017

書　評

ロジェ・ディオン著　福田育弘訳『ワインと風土―歴史地理学的考察―』人文書院

Roger Dion, *Le Paysage et la Vigne. Essais de Géographie Historique*

田中　達也

Tatsuya TANAKA

Key words：

本書は，コレージュ・ド・フランスの教授として「歴史地理学」の講座を担当した地理学者ロジェ・ディオンが，フランス地理学の伝統である「可能主義」（環境可能論）の立場から，商業的農業の一形態であるワイン用ぶどう栽培の起源や分布などについて考察した論文を採録したものである。

本書を構成する論文は，以下の通りである（収録順）。

「フランスのワイン用ぶどう栽培の歴史序論」
「ワインの品質の決定要因をめぐる新旧論争」
「ブルゴーニュのぶどう畑の起源」
「ローマ時代のガリアにおける都市とぶどう畑－ブルゴーニュの事例」
「中世における聖職者によるワイン用ぶどう栽培と王侯によるワイン用ぶどう栽培」

「フランスのワイン用ぶどう栽培の歴史序説」では，ワイン用ぶどうの栽培地域の拡大過程とその背景が通覧されている。ローマ時代，北方の市場への輸送費節減のために，ワイン用ぶどう栽培地が地中海沿岸とヨーロッパ西岸・北岸を結ぶ輸送路に沿って延伸され，寒さや湿気に強く，高品質のワインを作り出しうる新品種の開発がこれを可能とした。11世紀末までに輸出用のワインを生み出すことで大発展を遂げたのは，最北に位置する，あるいは最短もしくは最も簡便な交易ルートで北海と結びついたぶどう畑であり，12世紀の北方へのワイン輸出の拡大も，新たに整備された交易拠点の周辺に開発されたぶどう畑に負うものであった。17・18世紀には，より多くの利益を求めて大都市地域と結びついたぶどう畑で多収量品種への切り替えが進み，上質のワインを独自の名称で区別する必要性が高まった。ワインの市場と結びつくことにより，自然環境を克服して栽培地を北進させることがフランスのワイン用ぶどう栽培の歴史であり，最も上質で最も有名なワインである「シャンパン」もこうした人間の営みの結実と位置づける。

「ワインの品質の決定要因をめぐる新旧論争」では，ワイン用ぶどう畑の分布や，ワインの品質の差異が，気候や土壌といった自然条件によって決定されるという，地理学者やワインの専門家の間で一致し，管理呼称ワインの保護に関する法律的文書により公的な認証を得てきた意見が覆されていく。良質のワイン用ぶどう栽培は多額の費用を要し，鉄道開設以前にはその分布は北ヨーロッパの大市場との連絡が容易な海港や航行可能な河川などの周辺に限られた。逆に，こうした交通条件下にない地域は，土壌や気候などの自然条件に恵まれても，良質なワインの産地とはなり得なかった。すなわち，一般的な見解と異なり，良質のワイン用ぶどう栽培地域の成立には，ぶどう栽培上の条件よりも，ワイン販売上の条件が優先していたのである。

その最たる事例が，良質なワインの生産地として世界的に知られるボルドーである。上質のぶどう栽培に適するとされる石灰質の土壌ではなく，珪素分を含んだ粘土質の沖積土層が広がり，フランス大西洋岸で最も雨の多いガロンヌ川下流低地が，海上交通と結びつくことで良

質のワインを生み出すぶどう栽培地域となった。そこには，こうした自然条件下でも生育可能で，熟成タイプのワインとなる品種の開発という人間の営みがあった。輸出量の増加にともない，栽培地は渓谷の底にあたる場所にまで拡大するが，やはりそれは新品種の開発ときめ細やかな栽培技術の確立によって実現したものであった。ディオンは，「ある地方のぶどう栽培の命運を決する要素は，良質のぶどう畑を自然条件の恵まれない土地にまで作ろうとする際に払われる努力のうちに見てとれる。」と述べ，こうした人間の営為の蓄積によって形作られた土地とぶどう畑との結びつきが，自然発生的と思われるほどに調和に満ちたものであったゆえに，自然優位の解釈が広く受け入れられてきたとみる。

「ブルゴーニュのぶどう畑の起源」「ローマ時代のガリアにおける都市とぶどう畑－ブルゴーニュの事例」は，いずれもブルゴーニュ地方を対象とした考証であり，前者は，ローマの主要な通商路に沿う「ボーヌの丘」を，アントニウス朝期のガリアのなかでも早くに拓かれたぶどう栽培地であったと位置づける。それは，霜への抵抗力をもち，初霜の頃に熟して上質のワインとなる品種を発明するという人為の賜であった。

後者は，「コート・ドールの丘」のなかに著名なワイン用ぶどう畑の集中地域を見出し，それが自然条件によるものではなく，ローマ帝国末期とメロヴィング朝時代のガリアにおけるカトリック教会の教区区分という歴史的背景に起因することを提示する。著名なぶどう畑の集中地域はオタンの司教区の範囲内にあり，都市オタンの比較的恵まれない交通・商業的環境ゆえの，貴族層によるぶどう畑の開発と改良への多大な投資が，高品質のワインの生産へと帰結したとする。

「中世における聖職者によるワイン用ぶどう栽培と王侯によるワイン用ぶどう栽培」では，多くの証言や記録により明るみになる，カトリック教会や王侯のぶどう栽培に向けられた熱意が，ぶどう栽培の分布に大きく影響したことをその時代的特徴とともに示す。

ディオンの研究は，フランスの各地や各時代を対象にして，ワイン用ぶどう畑よりなる農村景観の形成過程およびその要因の解明を企図するものであるが，本書にみられる論考では一貫して，ぶどう畑の分布やワインの品質が自然環境によって決定されるのではなく，人間の意志の結果であることが説得的に示されていく。また，その対象は，ぶどう栽培地域ごとの品質の差異といったマクロスケールの議論ばかりでなく，同一地域内での個々の畑ごとのワインの品質の差異といったミクロスケールの議論にも及んでいる。そこでも，生産者により払われる努力（集約性）の畑ごとの差異という「人間の意志」を，品質の差異をもたらす主因と位置づけるが，考察はこれに止まらず，フランス革命後のぶどう畑の民間への払い下げと，分割相続による生産者の細分化という歴史的経緯を，努力の差異や品質のばらつきが生じる要因として見出している。

さらに，農業の研究でありながらその枠内に止まらない多面的な検討は，ヨーロッパにおけるワインの文化的価値にも及ぶ。ヨーロッパ社会において，ワインは単なる飲料ではなく，社会的尊厳を表現する装飾品として欠くことのできないものであった。聖職者や王侯といった高位の人々が，生活圏内にぶどう畑を維持し，多くの資金と労力をつぎ込む集約的経営を行ったのはそれゆえであり，気候や地形・土壌といった自然条件に恵まれない場所にぶどう畑が営まれ，そこから高品質のワインが生み出され得たことも，このような観点をもつことによってよりよく理解することができるのである。ワイン用ぶどう栽培という事象とそれがみられる場所との関わりを，自然環境や歴史的背景，産業や文化など多様な観点から考察し，事象の存立要因を解明するという，地理学に特有の考察方法を高次元かつ効果的に実践した成果として，その価値は今日においても減じていないといえる。

事象の存立要因を自然環境に求める言説は，今日なお様々な場面であらわれている。評者の身近な地域に関わる事例を１つあげると，近世における都市江戸の発展とともに，その周辺には江戸に野菜を供給する近郊農業地域が形成された。このうち，江戸の東郊地域では小松菜などの葉菜類，北郊では滝野川人参などの根菜類，西郊では南瓜など果菜類の栽培が特徴的に行われていく。こうした地域分化の要因が，沖積低地からなる江戸東郊では水気を好む野菜の生産，洪積台地が多くを占める北郊では根を地中深く伸ばす野菜の生産と，地形条件の差異により説明されてきた。

しかし，東京西北部に位置する北豊島郡における，明治から昭和初期にかけての近郊農業の動向を検討した渡辺善次郎は，工芸作物→雑穀→主穀→根菜→果菜→葉菜→種苗→観賞植物という順序で，東京の中心に最も近い地域の状況が，次第に遠隔地に波紋のように広がり消滅していく過程を提示した。これによると，ある時点で根菜類を栽培していた地域は，その後の都市の拡大・発展とともに，果菜類の栽培を経て葉菜類の栽培へ至ることとなり，地形条件と栽培作物を結び付ける説明は成り立たない。一方で，渡辺は近郊農業の変遷を，運搬性の高

いものから低いもの，粗放作物から集約作物への推移と位置づけている。

自然環境の役割のみを重視する言説に対して，地理学はこれを補強する役割に矮小化することなく，事象およびそれがみられる地域のより正確な理解のため，不断により深く多面的な分析・考察の必要性を示唆し続けていかなければならないであろう。そのためにも，本書で示されているものの見方や考え方は，研究や教育の様々な場面で常に意識し，実践していくことが求められるものであろう。